アッヴィ、『クローン病患者さんの実態と意識調査』の結果を発表

July 04, 2016

アッヴィ、『クローン病患者さんの実態と意識調査』の結果を発表

アッヴィ合同会社（本社：東京都港区、社長 ： ジェームス・フェリシアーノ）は、本年6月、クローン病患者さん103名を対象に、「クローン病患者さんの実態と意識調査」を実施しました。

調査結果からは、患者さんの6割以上が20代以下でクローン病を発症しており、その結果、約4割が仕事もしくは学校をやめていることが分かりました。このような社会生活への影響は、下痢や腹痛によるトイレの回数の急増や、食事の制限など、クローン病特有の症状による著しいQOLの低下が原因であると考えられます。

近年、治療の進展により長期寛解（長期的に症状を抑えること）が可能となり、患者さんのQOLを改善できるようになりました。しかし、今回の調査結果から、クローン病患者さんの半数以上が長期寛解のための治療法を知らないということが明らかになりました。

【調査結果サマリー】

- クローン病患者さんの**6割以上が20代以下でクローン病を発症**しており、その結果、**仕事もしくは学校をやめている患者さんは約4割**。また、クローン病を発症したことで、家庭や職場/学校の人に迷惑をかけたと感じている患者さんは約6割。何事にも自信を持てなくなったと感じている患者さんは約4割。クローン病の発症が、社会生活や精神面にも強く影響していることが浮き彫りとなりました。

- クローン病患者さんにとって、**日常生活における課題は食事およびトイレの回数**。食事制限のために食生活において様々な課題を抱え、**食事を栄養剤に置き換えている患者さんは6割以上**。大便のために**1日6 回以上トイレに行っている患者さんは約5割**。そのうち、**10回以上トイレに行っている患者さんは、全体の約2割**。食事への配慮やトイレの回数により、患者さんの日常生活が大きく制限されている実態が示唆されました。

- クローン病患者さんの**半数以上が長期寛解の治療法を知らず**、全体の**約9割が長期寛解の治療法があれば試してみたい**と回答。症状を長期的に抑えることを望む患者さんがほとんどを占める中、治療に関する新しい情報が届いていない状況が示されました。

クローン病は、10代後半から20代の若年層[1]に頻発する原因不明の消化器の難病です。近年、患者数は急増しており、2000年から比較すると約2倍に増えていることが明らかになっています[2]。クローン病を発症すると、下痢や腹痛によりトイレの回数が急激に増え、また、通常の食事を摂ることが難しくなるため、患者さんのQOLは著しく低下します。

クローン病患者さんのQOL向上のためには、まず患者さん自らが長期寛解の高い治療目標を持ち、医師と積極的にコミュニケーションを取ることで、治療に積極的に関与していただくことが重要となります。

アッヴィ合同会社は、クローン病患者さんのQOL向上に貢献することを目指し、活動を行って参ります。

クローン病患者さんの実態と意識調査結果

【調査概要】

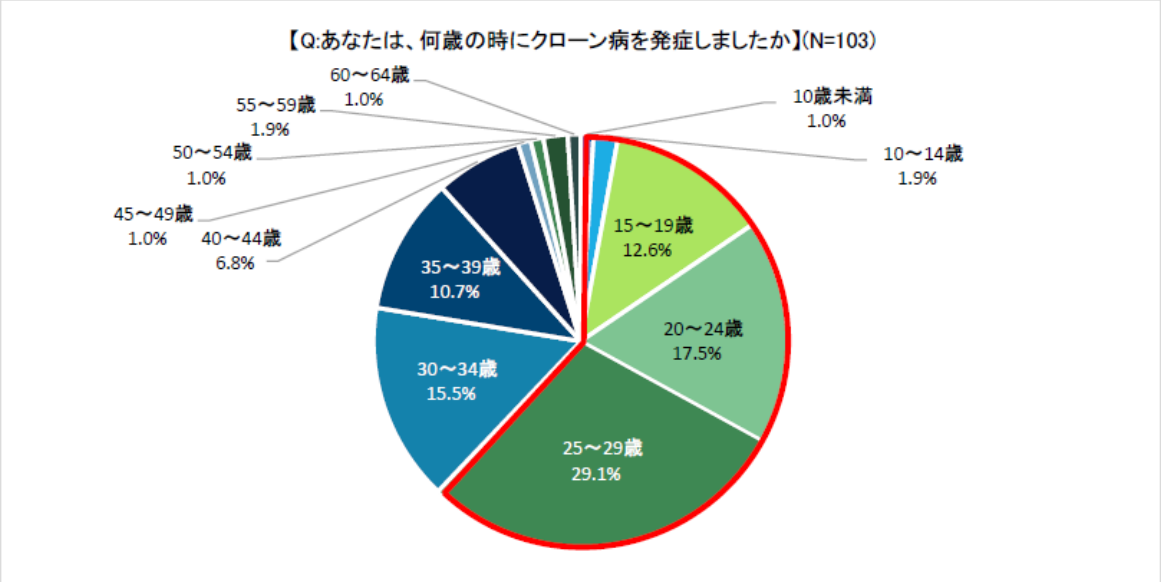
- 調査対象者
  クローン病患者　103名（男性69 名、女性34名）
- 調査手法
  オンライン調査　（マクロミル・ネットモニターを利用）
- 調査時期
  2016年6月

【調査結果詳細】

■ クローン病患者さんの62.1%が20代以下でクローン病を発症

- 62.1%のうち、10代で発症した患者さんは全体の14.5%、20代で発症した患者さんは全体の46.6%

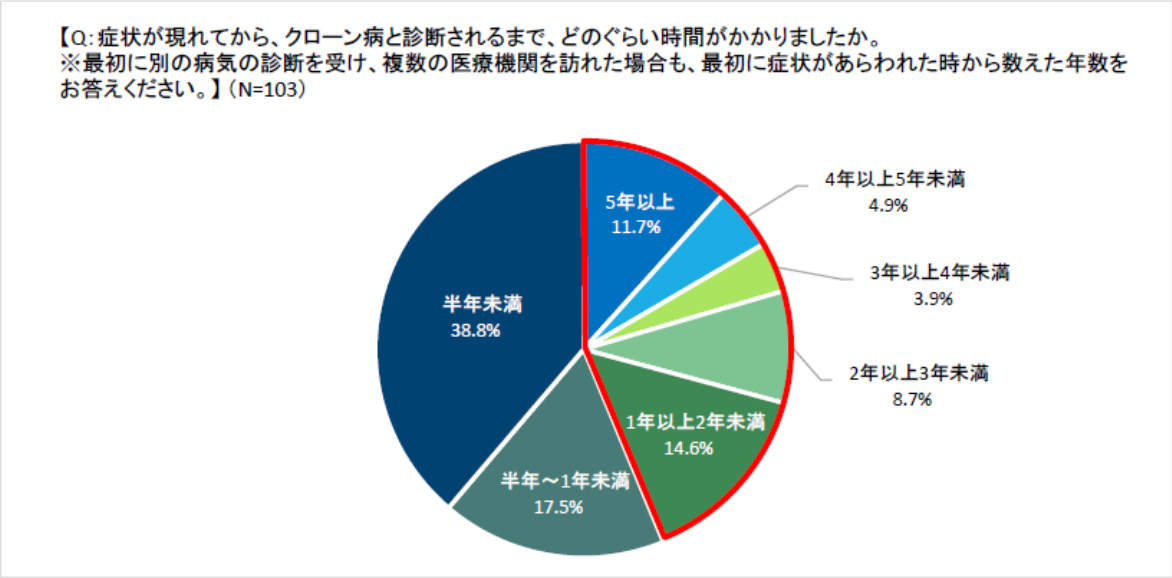
【グラフ1】



■ 症状が現れてから診断まで1年以上要したと回答したクローン病患者さんが43.8%

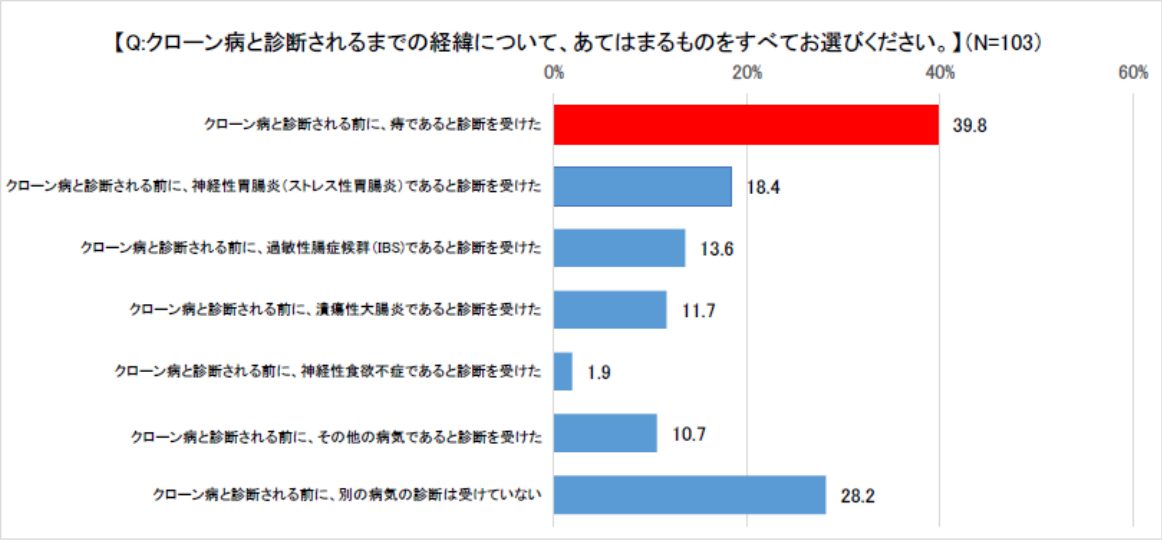
- □ 43.8%のうち、1年以上3年未満かかった患者さんは全体の23.3%、3年以上5年未満の患者さんは全体の8.8%、5年以上の患者さんは全体の11.7%

【グラフ2】



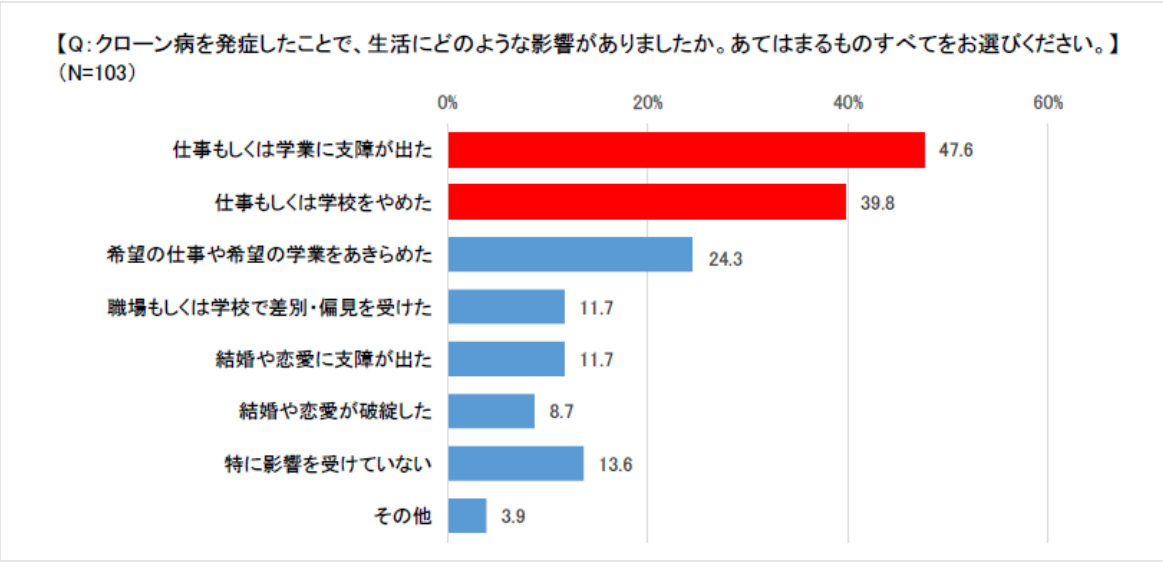
■　クローン病と診断される前に、痔であると診断された患者さんは39.8%、神経性胃腸炎と診断された患者さんは18.4%、過敏性腸症候群（IBS）と診断された患者さんは13.6%

【グラフ3】



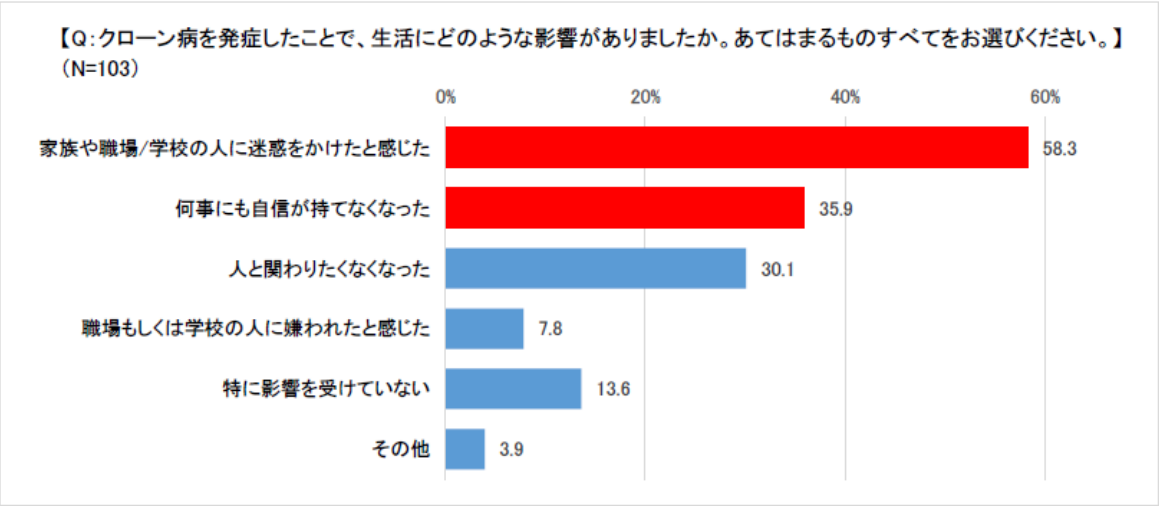
■　クローン病を発症したことで、仕事もしくは学校をやめた患者さんは39.8%、仕事もしくは学業に支障が出た患者さんは47.6%

【グラフ4】



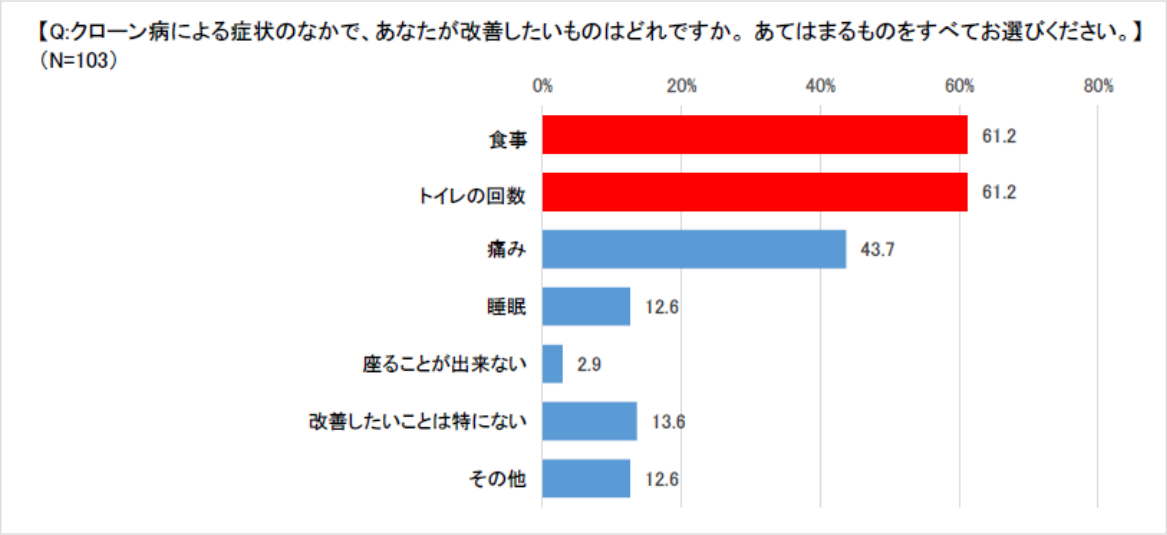
■　クローン病を発症したことで、家庭や職場/学校の人に迷惑をかけたと感じている患者さんは58.3%、何事にも自信を持てなくなったと感じている患者さんは35.9%

【グラフ5】



■ **61.2%のクローン病患者さんにとって、日常生活における課題は食事およびトイレの回数**

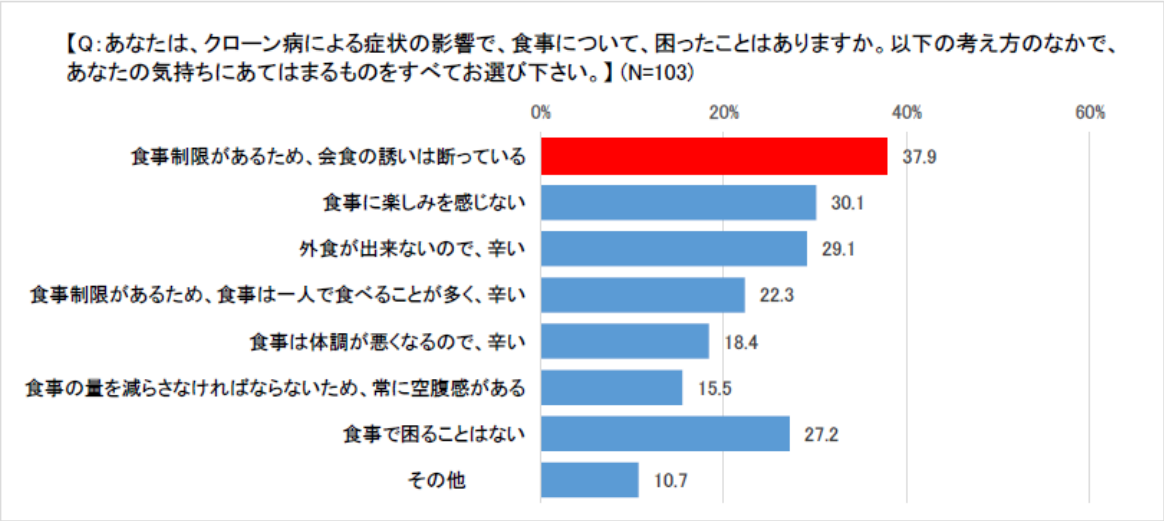
【グラフ6】



■ **クローン病患者さんは、食生活において様々な課題を抱えている**

- 「食事制限があるため、会食の誘いは断っている」と回答した割合が最も高く37.9%、次いで「食事に楽しみを感じない」患者さんが30.1%、「外食が出来ないので、辛い」が29.1%

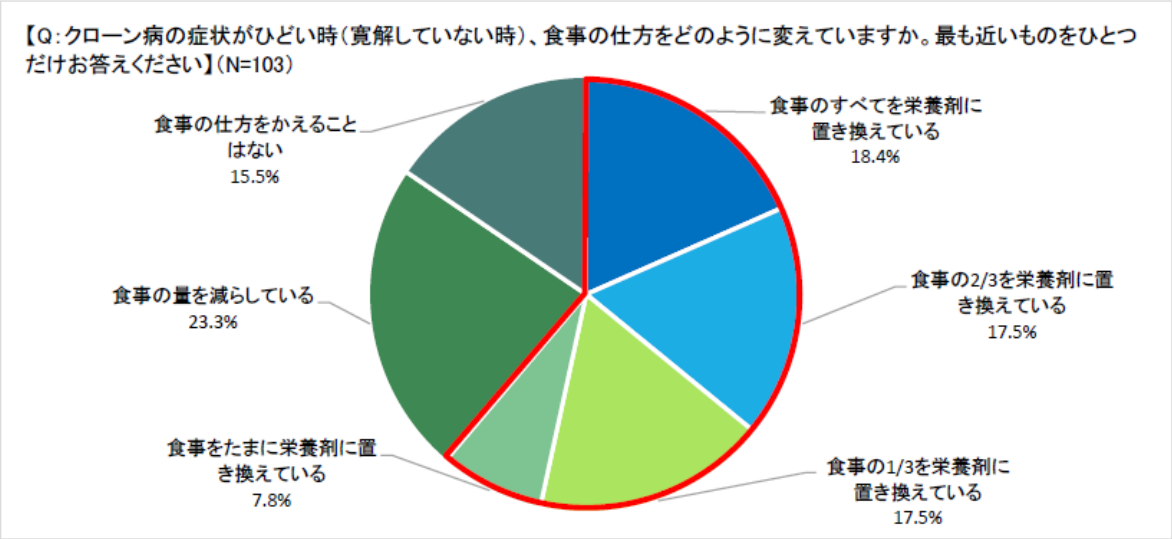
【グラフ7】



■ **食事を栄養剤に置き換えているクローン病患者さんは61.2%**

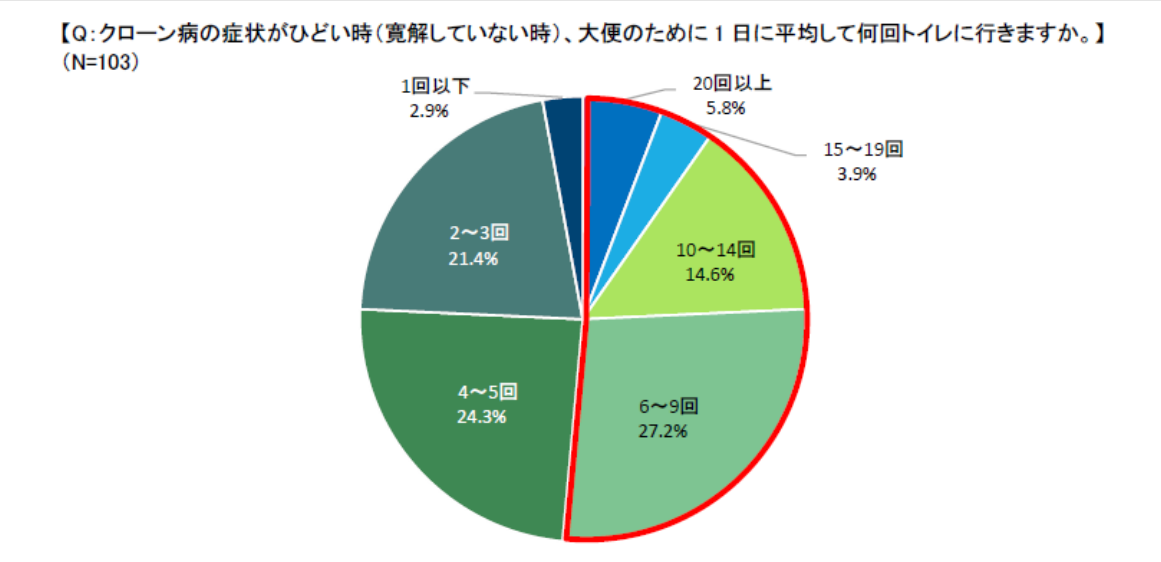
- 61.2%のうち、「食事をすべて栄養剤に置き換えている」が患者さん全体の18.4%、「食事の2/3を栄養剤に置き換えている」が全体の17.5%、「食事の1/3を栄養剤に置き換えている」が全体の17.5%、「食事をたまに栄養剤に置き換えている」が全体の7.8%

【グラフ8】



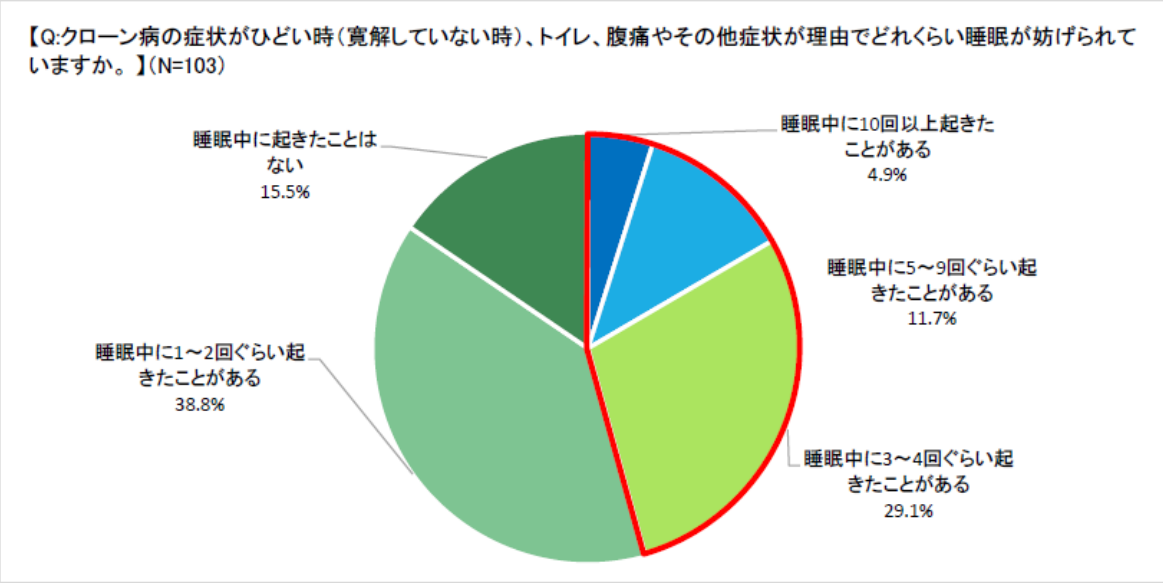
■ **クローン病患者さんの51.5%が大便のために1日6 回以上トイレに行っている、24.3%が10回以上と回答**

【グラフ9】



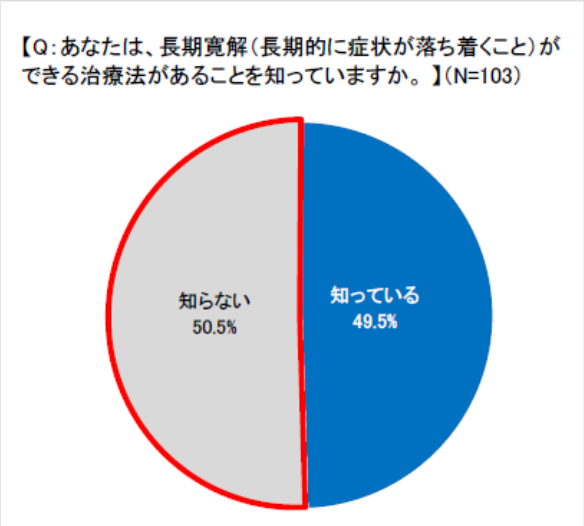
■ クローン病患者さんの45.7%が、トイレや腹痛等の症状により睡眠中に3回以上起きている、16.6%が5回以上と回答

【グラフ10】

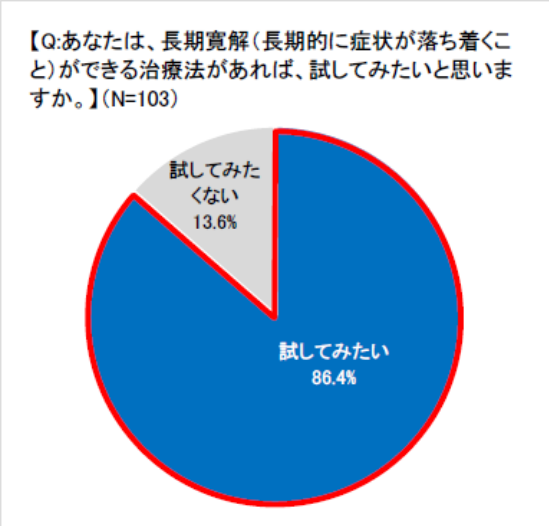


■ クローン病患者さんの50.5%が長期寛解の治療法を知らない、しかし86.4%の患者さんが長期寛解の治療法があれば試してみたいと回答

【グラフ11】

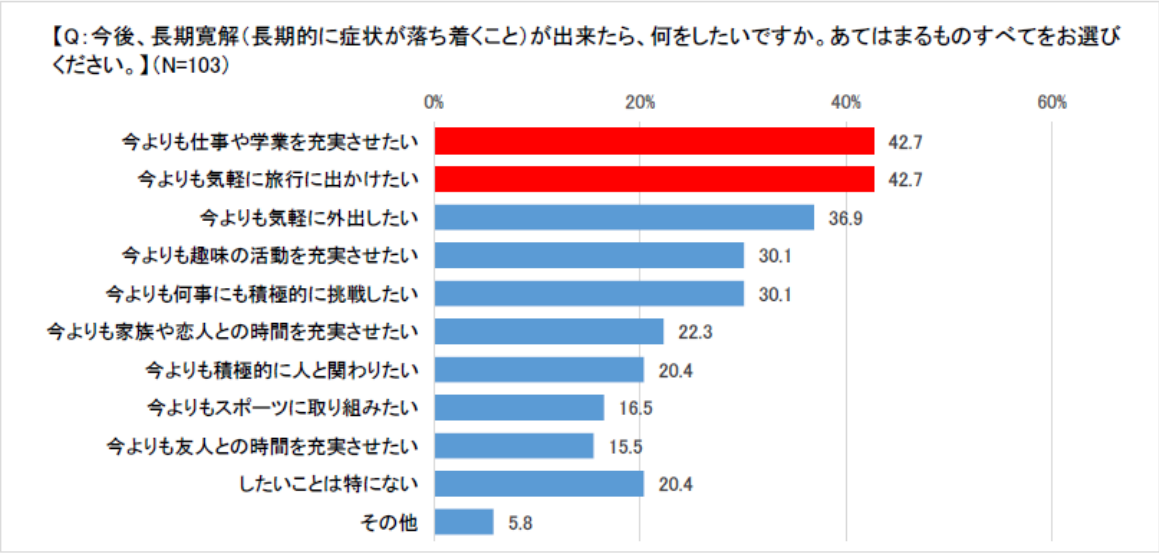


【グラフ12】



■ 長期寛解が出来たら、42.7%のクローン病患者さんが仕事や学業を充実させたい、もしくは旅行に出かけたいと回答

【グラフ13】



アッヴィについて

アッヴィは、アボットラボラトリーズからの分社を経て2013年に設立された、研究開発型のグローバルなバイオ医薬品企業です。専門知識や献身的な社員・イノベーション実現に向けた独自の手法を通じて、世界で最も複雑かつ深刻な疾患領域における先進的な治療薬を開発・提供することをミッションに掲げています。アッヴィは、100%子会社のファーマサイクリックス社を含めて世界で28,000人以上を雇用し、170カ国以上で医薬品を販売しています。当社の概要や人材・製品群・コミットメントに関する詳細はwww.abbvie.com をご覧ください。よろしければTwitterアカウント@AbbVieもフォローください。また、人材情報はFacebookやLinkedInページをご参照ください。

日本においては、アッヴィ合同会社の約1,000人の社員が、医療用医薬品の研究・開発や販売に従事しています。自己免疫疾患・新生児・肝疾患・ニューロサイエンスの各領域を中心に、患者さんの生活に大きく貢献できることを願っています。詳しくは、www.abbvie.co.jpをご覧ください。

参考文献—

1難病情報センター, 特定疾患医療受給者証交付件数

http://www.nanbyou.or.jp/entry/1356

2厚生労働省, 2012年度臨床調査個人票集計資料